岡田信一郎の建築作品における梶田恵設計・制作家具の役割

THE ROLE OF KAJITA MEGUMU'S FURNITURE IN OKADA SHINICHIRO'S ARCHITECTURAL INTERIORS

児島 由美子*
Yumiko KOJIMA

This paper attempts to show the character of interiors designed by the architect Okada Shinichiro based on some pieces made by the furniture maker Kajita Megumu. Although a considerable amount of research about his life, career, work, speeches and writing has been carried out by earlier scholars, little is known about Okada's interior design. On the other hand, research about Kajita has been carried out in connection with a memorial exhibition about him and an exhibition of plans of his furniture and industrial design work. The data collected in the course of this research is very useful in helping us to understand Okada's interior designs. However as research it is inconclusive. In this paper, I collated the plans kept by Okada with the plans kept by Kajita, and thereby established which Kajita's works were designed for Okada's architectural interiors. As a result, I was able to clarify the characteristics of Okada's interior design work.

Keywords : Okada Shinichiro Kajita Megumu Architecture Interior Decoration Furniture

岡田信一郎 梶田恵 建築 室内装飾 家具

1. はじめに

建築家岡田信一郎(以下、岡田)は自作の重要な作品に梶田恵(以下、梶田)の家具・室内デザインを多く採用している。このため、梶田の家具が岡田作品にとってどのような役割をもっていたかを考察することで、岡田の本質が明らかになると考える。

岡田については、彼の人物像、生涯、設計または関係した建築作品、言論にいたるまで、先学の研究者たちによって多くの研究が行われてきた。しかし、この中で今回取り上げる梶田について触れたものはほとんどない状況である^{注1)}。

梶田については家具史の方から『梶田恵回顧展 日本のアール・デコ』(家具の博物館)^{注2)}と『梶田恵家具木工芸設計図展』(東京藝術大学芸術資料館)^{注3)}のために調査が行われ、彼が岡田の多くの建築作品において家具・室内意匠を設計・製作していたことや両人の関係について明らかになっている。その成果が図録『梶田恵回顧展 日本のアール・デコ』^{注4)}にまとめられており、岡田の建築作品の室内を知るために大いに役立つ。

これによれば、梶田の仕事の内容は極めて広く、家具デザイナーと工芸作家の両面で優れた作品を残している。その家具作品は様式主義からモダンまで幅広いが、特にアール・デコについては日本で最初期に手掛けており、大正4年にはフランス政府主催の「装飾美術と近代工業の国際展覧会」にライティングビューローを出品し、入賞するほどであった。岡田が梶田を知ったきっかけについては、梶田が東京美術学校図案科在学中に同校の講師をしていた岡田から図学か建築装飾の講義受けていた可能性があることと、岡田が審査員をしていた大正11年の平和博覧会に梶田が出品しており、そのとき岡田の目に留まったのであろうとしている。また、平和博覧会の

翌年、大正12年には岡田は鳩山一郎邸の家具を梶田に任せており^{注5)}、大正14年の日赤本社、昭和2年の東京府立美術館増築、昭和5年の信濃町教会(戸山教会)などの各建築に梶田の家具を採用したことが明らかにされた。このように、既に梶田についての調査研究を通して、岡田の建築作品との関わりが判明している。

岡田のどの建築作品に梶田の家具が採用されているかという点については一部が明らかにされたものの、具体的に、どのような室内空間であったか、また、その空間をどのような装飾方法、または考えによって設計したかという点については明らかになっていないため、本稿では、以上の点を明らかにするとともに、彼らの設計・製作活動の背景についても考察を試みたい。

本研究で使用する主な資料は、「梶田恵家具及工芸品設計図」^{注6)}・「岡田信一郎設計建造物家具資料」^{注7)}所収の家具図、家具配置図と、「岡田兄弟建築設計図」^{注8)}所収の平面図、展開図である。これらを照らし合わせ、岡田が梶田に設計・制作を任せた作品を明らかにする。さらに、図面の照らし合わせだけでは不十分なものもあるため、その場合は古写真^{注9)}・聞き取り資料^{注10)}・雑誌刊行物^{注11)}・既往研究^{注12)}を援用する。

2. 調査結果

使用する図面資料についての調査結果は以下に述べるとおりである。

東京藝術大学大学美術館所蔵「梶田恵家具及工芸品設計図」は、梶田が保管していた図面で、家具や照明器具の1/10図、詳細図、配置図、カーテン掛図、暖炉前飾図、金具図などが収められている。

* 千葉大学大学院自然科学研究科人間環境デザイン科学専攻
博士後期課程・修士(家政学)

Graduate School of Science & Technology, Chiba Univ., M. Home Economics

美濃紙にインキングし、彩色したもので、寸法線が点線、寸法がアラビア数字で書かれており、単位は寸である。図面名は記載されているが、室名や建物名が記載されている図面が少ないため、他の資料を援用しなければ各図面について、どの建築作品のものであるか特定することは難しい。同美術館所蔵「岡田信一郎設計建造物家具資料」は、岡田が保管していた建築設計図の一部である^{註13)}。トレーシングペーパーや美濃紙に、鉛筆で描かれており、彩色されているものもある。青写真の図面もある。建物別に図面が分類された状態で保管されており、家具図、配置図、カーテン掛図、スケッチが収められている。寸法線は点線と実線があり、寸法はアラビア数字、単位は寸である。図面名や縮尺、室名、建物名が記載されているものがあつたり、岡田の印が押されているものがあつたりと様々である。青写真の図面は、「梶田恵家具及工芸品設計図」の書式によく似ていることから、梶田が描いた図面である可能性が高く、青写真の図面以外でも寸法線が点線なのは、書式や図の様子が「梶田恵家具及工芸品設計図」に類似しているため、梶田の図面である可能性が高い。また、寸法線が実線で書式も異なるが、「梶田恵家具及工芸品設計図」に収められた図に類似した形状の家具が描かれている図面があることから、岡田がイメージしている家具を描いた上で梶田に設計を依頼していたのではないかと推察できる。

しかし、いずれも裏付けがなく、さらなる調査が必要である。

3. 考察

3-1. 梶田が関わった岡田の建築作品と室の種類

図面の書式や図面にある家具の種類、資料などの分析から判断して、岡田の建築作品における家具の殆どは梶田が設計した可能性が高いと考えられる。しかし、ここでは、図面やその他の資料から確認できたものだけを取り上げ、梶田が関わった岡田の建築作品として表1にまとめた。以下にその13例を竣工年順にあげる。

鳩山邸(大正13年) 日本赤十字病院本館(大正14年12月) 東京府美術館(大正15年3月) 日本赤十字本社(大正5年3月修繕) 塚越邸(昭和3年) 日赤大阪支部(昭和4年) 戸山教会(昭和5年9月)^{註14)} 山尾邸(昭和8年頃)^{註15)} 明治生命保険会社(昭和9年) 今井邸(昭和10年頃)^{註16)} 中野邸(竣工年不明) 守田邸(竣工年不明) 近藤邸(竣工年不明)

以上より、梶田が関わった岡田の建築作品は、住宅建築が7例と一番多く、次いで病院も含めると公共建築が5例、商業建築が1例であることがわかる。

次に、これらの建築において梶田が担当したのはどの部分であったかをみると、応接間、応接間兼広間が10例と最も多く、次いで食堂が6例、貴賓室、客間がともに3例、便殿、広間・ホール、ペランダがともに2例、そのほか、礼拝堂(一部)、会議室、役員室、書斎、支那室、玄関、内玄関、店頭、夫人室、着換室がともに1例であることがわかる。部屋の用途を考え合わせると、梶田が岡田の建築作品のために設計・製作した家具の多くは、私的な用途の部屋より、客人を通すような公的な用途の部屋に採用されたことがわかる。これは建築の規模に関わらず共通している。

以上から、梶田は住宅のような小規模の建築に携わることが多く、担当する部屋は、応接間や食堂など公的な用途の部屋が多いという傾向が見られる。

ただし梶田の場合、設計して自身の工房で製作まで行う場合と、設計だけをして製作はほかの工場に出す場合があつたので、後者なら建築全体の家具・室内意匠の設計もしていることもある。

これには小規模な仕事しか請けられない梶田工房の製作体制が背景にあつたと考えられる。当時の梶田工房には4名のスタッフがおり、製作スタッフは彫刻象嵌の1名であつた。加えて、梶田工房では一工程毎に厳しいチェックを行うため、工期と人工がかさんで高価になった^{註18)}。このような状況であるため、受注も小規模のものしか受けられないし、発注側も予算や工期に余裕がない限りは規模の大きい仕事を頼めなかったと考えられる。実際に、梶田が担当するのは建築規模に関わらず、いくつかの特別な部屋だけであることが多い。今回の調査結果では図面資料から裏付けができたものしか取り上げていないので確かではないが、表1に示した13例の建築作品について言えば、すべてに当てはまる。

たとえば、昭和9年に竣工し、岡田の遺作といわれている明治生命保険会社の設計については、1階店頭、2階各室の家具やカーテンなど大部分を行っているが、2階社長応接室の家具だけを梶田工房で製作し、残りは寺尾商店に製作を外注している。そして講堂の連結椅子などはコトブキ商店に外注している。

しかし、このような製作体制だったからこそ非常に工芸的で緻密な家具を製作することができたのである。逆に、工芸的で緻密な家具を製作するためにこのような製作体制にしていたといったほうが適切かもしれない。それだからこそ、岡田は自身の建築の顔であり、客人の目に触れる公的な用途の部屋(接客空間)を梶田に担当させたと考えられる。

3-2. 梶田が担当した室の室内装飾

次に、「岡田信一郎設計建造物家具資料」の展開図から梶田が担当した室の室内装飾様式をみると、表1に示したように、ゴシック、ルネサンス、ロココ、ジャコビアン、スパニッシュ、コロニアル、アンピールといった古典様式から中国風、アール・デコまで自在に扱っていたことがわかる。多いのはやはり古典様式だが室内装飾様式と家具の様式が対応していて、様式の鬼才といわれた岡田にとって、家具についてもあらゆる様式をこなせる梶田はこの上ないパートナーだったと考えられる。しかも、その水準はデザイン的にも工作的にも極めて高いのである。

明治生命保険株式会社の社長応接室はスパニッシュ様式の室内に同様式の家具を配置している。スパニッシュ様式は本来、粗野でダイナミックな意匠が特徴であるが、これとは逆に梶田の家具は細かな象嵌や彫刻を施した美術工芸的ともいべきものである。しかしこのことにより室内をより高雅な雰囲気に行っているのである。洋風の室内は全体の完成度が家具によって非常に大きく左右されるということを、岡田は当然ながら熟知していたであろうから、このような梶田の家具を自身の建築作品に数多く採用した点に岡田の様式建築に対する姿勢を見ることができる。数奇屋建築をつくるような細やかで精緻な感覚で様式を扱い、細部のディティールにまで配慮した室内を最後に仕上げる家具としては、同じく細部まで緻密に仕上げられた美術工芸品のような梶田の家具でなければならなかった。すなわち、これが岡田信一郎の建築作品における梶田の家具の役割の一つといえる。

また、一方で異なる様式を同じ室内に用いている場合がある。たとえば、鳩山邸の第3応接室(食堂)では、ジャコビアン様式の室内に同様式の食卓とコロニアル様式の椅子と食器棚を配置している。様式は異なるが、いずれもルネサンス期に興った様式であるため細部の形態や彫刻が違っていても、比較的近似したデザインで、調和しやすい。むしろ、ジャコビアン調に忠実にするとやや重苦しい印象になり、コロニアル調に忠実にするとやや軽すぎる印象になるため、併せて用いることによって、バランスのとれた室内装飾を実現させていると考えられる。このような視点に立って、表1を改めてみると、鳩山邸の第3応接室のようにその室内装飾様式が興った時代と同時代の様式を組み合わせているパターンと、古典様式にモダンを加味してアレンジしているパターンがあることに気づく。

このように、室内装飾の加減を行う要素としての役割も岡田の建築作品における梶田の家具の役割であったと考えられる。これは、岡田同様に様式を自在に扱うことができた梶田だからこそできた仕事であった。

表2 岡田信一郎と梶田恵の年譜・作品(次頁に続く)

岡田信一郎年譜		作品	年	作品	梶田恵年譜
学生時代	東京都芝区に生まれる(11月20日) 父謙吉(陸軍薬劑監)、母いちの次男		M16		盛岡市に生まれる 父高人(元士族)、母よふの次男(9月17日)
	市立富士見小学校を経て高等師範付属中学に入学		M23		
	第一高等学校に入学(7月)		M29		
	東京帝国大学工科大学へ入学		M33		県立一関中学校に入学(4月)
	東京帝国大学工科大学を卒業(7月)	佐藤男爵寿像台座(東京 順天堂大学前庭)	M36		
	恩賜賞を受ける		M39		
	警視庁の嘱託となる(7月)				
	東京美術学校講師となる(5月2日)		M40		
	警視庁嘱託を解く(6月)		M41		東京美術学校図案科に入学
	日本銀行の建築事務を嘱託 日本銀行小樽支店の実施設計から施工図を担当				
研究・教育・評論活動・台座・住宅の設計	日本銀行函館支店の設計(未実施) 台湾總督府土木部建築取調を嘱託(7/9-10/31) ロンドン日英博覧会委員として渡欧予定(病欠) 早稲田大学理工科建築学科の講師を嘱託(1月)		M43		
			M44		
		小松宮彰仁親王殿下像台座(東京上野公園内) 石黒子爵寿像台座(陸軍軍医学校校内)	M45	舞台模型を出品(自由劇場主催 劇場美術展)	同校を中退
		高木博士邸(東京)設計 「高木博士邸の建築」『建築工芸叢誌』第21冊	T2		弘前師団に入隊一年間軍隊生活を送る
		橋本雅邦氏像台座(東京美術学校中庭) 川端玉章氏像台座(東京美術学校中庭) 錦島閑雲像台座(佐賀市松原公園内) 古川松根氏像台座(佐賀市松原公園内)	T3	自由劇場第8回公演「星世界へ」の家具設計	自由劇場第8回公演「星世界へ」の家具主任
	日本赤十字社より同社建築設計図案の調査を嘱託。引き続き顧問となる	下山博士像台座(東大構内) 長谷川泰氏像台座(湯島天神境内) 藤岡博士像台座(川崎 東京電気構内) 三浦守治博士像台座(東大構内)	T4		
		大沢謙二博士像台座(東大構内) 横浜正金銀行東京支店(長野宇平治の代理) 大阪中央公会堂(大阪 中ノ島)	T5		芝の寺尾商店に入社(家具設計担当) T5頃
		相馬子爵像台座(東京相馬子爵邸内) 三輪田真佐子女史像台座(三輪田高等女学校前庭) 市村座設計	T6 T7 T8		有馬さとえ(洋画家)と家具の表面に細密画を描く研究を行う 寺尾商店を退社
	文部省より師範学校中学校・高等女学校教員等講習会講師を嘱託。(7月)			銀座資生堂の店内装飾設計	梶田スタジオ(芝南佐久間町)を開く 自由劇場第9回公演「信仰」の小道具主任 宮沢工作所の顧問になる 坂本昌持宅(渋谷区伊達跡 現広尾)に指物工場を開く
		小千谷小学校(新潟) 石黒子爵銅像台座(大倉高等商業学校校内) 立花校長銅像台座(同) 森村男爵銅像台座(森村銀行 焼失) 第六世森村一左衛門翁之碑(青山墓地) 被木井六郎実長公銅像台座(身延山) 国井家観音堂(国井門三郎氏邸内) 村上邸(東京)設計	T9	日本民間愛児兼用装飾鏡台を出品し褒状を受ける(第8回農商務省図案及び応用作品展 出品者 資生堂)	梶田の正会員になる
建築の設計活動盛ん	農商務省より、平和祈念東京博覧会審査官を嘱託。(3月)	大阪高島屋呉服店(10月)『新建築』第8年11月号 新潟県十日町小千谷銀行支店(11月) 西脇邸納骨堂 増島邸 村上邸 『建築新潮』大正13年8月 山口邸 中村直次郎邸 『建築世界』第16巻3号・4号	T10	ペンテングの家具出品(平和祈念東京博覧会) 書斎家具を出品 二等賞となる(第10回農展 出品者 資生堂)	家具飾金具の電飾を始める(彫刻家 相馬彦四郎の協力)
		日本赤十字社外来診療所(東京 3月) 日本赤十字社秋田・茨城支社 設計	T11		関東大震災で、芝南佐久間町の梶田スタジオを焼失
		日本赤十字参考館(12月) 青山会館	T12	銀座資生堂喫茶室復興家具を実地設計・製作(商家川島理一郎のスケッチをもとに設計・製作)	梶田かずと結婚 芝西久保桜川町に梶田スタジオを移転 銀座フタバ商店(輸入雑貨商)と取引開始
		鳩山邸 設計	T13	鳩山一朗邸家具を製作	
		山口邸		山口万吉邸家具を製作	
		村井邸 設計 『建築新潮』第8号		紫霞村夫人用机を出品 二等賞となる(第11回農展)	
					品岡作洋独・田が家立展の盛具後(観覧設計)中・期製

参考文献:『作品目録』『建築雑誌』日本建築学会昭和7年5月、大川三雄『岡田信一郎年譜』『日本の建築(明治・大正・昭和)』8三省堂 1982、中村圭介『梶田恵略年表』『梶田恵回顧展 日本のアール・デコ』、財団法人家具の博物館編集・発行、1980年11月11日

また、多くの様式の中でもゴシック期とルネサンス期の装飾を用いたものが多いが、「元来兄は西洋史については『ゴシック』時代と『ルネサンス』時代が好きであった。従って『ルネサンス』形式による作品がまことに多い—以下略」^{注19)}と、弟の岡田捷五郎が雑誌記事に書いていることから分かるように、これは室内装飾の設計というような細かい点まで配慮が必要な作業には、設計者の性格や趣向がより顕著に表れることを裏付けている。

3-3. 関わっていた期間

表2より、梶田が岡田作品に関わった期間は、今回の調査で判明したものだけで見ると、大正13年の鳩山邸設計段階から数えて一昭和7年に岡田は亡くなるが一昭和10年頃に完成した今井邸までの約12年間である。この12年間は、ちょうど岡田が建築の設計活動に復帰してから盛んに設計活動を行っていた時期である。大正11年の大阪高島屋から亡くなるまでの間に198件もの設計を手がけたが、梶田と仕事をした期間はまさにこのときであった。また、梶田にと

ってもこの12年間は最も洋家具を製作した時期で、梶田工房の最盛期であった。岡田の建築作品のための製作活動のほか、ほぼ毎年のように商工展や帝展に出品し受賞している。梶田は、大正8年に寺尾商店を退社して、梶田スタジオを開いた後、関東大震災までの期間は、自由劇場第9回公演「信仰」の小道具主任や、宮沢製作所の顧問などを務め、主に資生堂関係の仕事をしていた。岡田と仕事をするようになったのはちょうど関東大震災後で、今回の調査で判明した建築作品の家具はすべてこの時期に設計・製作された。

これらの背景には、大正から昭和初期にかけての好景気と、関東大震災による建築需要の高まりが大きく影響していると考えられる。表2からも分かるように、岡田が亡くなって、建築関係の仕事が少なくなつてからと、価格統制令が布かれた昭和14年以降、梶田の作品に占める工芸品の割合が増えた。また、統制下でも材料を供給してもらうようにと木工芸作家の地位向上のための活動も盛んに行っていたことから、高級な洋家具を作るための材料が乏しくなっていた様子が伺え、岡田の建築作品のために質の高い家具が製作でき

たのは当時の社会背景の影響が大きかったといえる。

4. まとめ

芸大所蔵の「梶田恵家具及工芸品設計図」の中から、梶田が岡田の建築作品のために設計・製作したものを特定し、その結果について考察を行った。

岡田の建築作品において梶田が担当した部分についての考察では、梶田が住宅のような小規模の建築に携わることが多いこと、応接間や食堂などの公的な用途の部屋の家具・室内装飾を担当することが多かったことを明らかにした。その要因として、梶田の設計・製作の方法を取り上げ、自身の工房で一貫して行う方法と設計を行って、製作は外注する方法があることを明らかにした。また、梶田工房の小規模な製作体制によって非常に美術工芸的で質の高い洋家具を製作できたことに注目し、そのような質の高い家具だったからこそ、岡田は自身の建築作品にとって顔とも言うべき客を通す室内空間にそれらの多くを採用したと考えた。

つぎに、梶田が担当した室の室内装飾について分析と梶田による

岡田信一郎年譜		作品	年	作品	梶田恵年譜	
建築の設計活動盛ん	気管支拡張症に冒され病状悪化 死去（4月4日）	歌舞伎座（1月）大日本国民中学（10月）	T14	ライティングビューローを出品 入賞する（フランス政府主催「装飾美術と近代工業の国際展覧会」）	独立後（中期）洋家具設計・製作が盛ん 岡田の建築作品・展覧会出品	
		日本赤十字病院本館（便殿 12月） 東京府美術館（3月 S4増築） 赤十字本社（3月修繕）	T15	日本赤十字病院本館貴賓室家具を製作		
		浅野図書館（4月 広島）国民新聞社（4月 東京） 東京府立化学工業学校（6月）九段坂病院（10月 東京）埼玉会館（11月）日本赤十字社本社修繕 増島法律事務所 設計『建築グラフ』昭和4年1月 飯田邸 設計 浜沢邸 設計		日本赤十字社貴賓室家具を製作		
		橋本銀行若松支店（5月）青山小学校（6月）東京府第一高等女子学校（10月）東京市田商店（10月）日本赤十字東京支部（10月）三柏ビルディング（11月）南邸 設計	S2	日本赤十字病院本館便殿家具を製作 飾棚（皇太子訪問国からの献上品を飾る）を宮内庁へ献上 銀座フタバ商店（建築設計菅原栄蔵）のフロントドア設計		
		鎌倉国宝館（3月）安田ビルディング（3月）御大 礼記念国産振興東京博覧会（3月）正求堂ビルディング（4月）黒田清輝記念館（10月）梅田ビルディング（10月）霞山会館（12月）日本赤十字社参考館増築（12月）山崎校長銅像台座 市田邸小柴邸 探蔵邸	S3	東京府美術館便殿の家具を製作 応接セットを出品 無鑑査となる（梶田案・寺尾直通作出 第14回商工省工芸展） 書机・椅子を招待出品（京都宮崎洋家具部創設記念展）		
		正路喜社（1月）東京美術学校列館（3月）東京府美術館増築（4月）東京府立第一中学校（5月）出雲ビルディング（7月）歌舞伎座食堂（8月）戊辰館（10月）嵯峨同業組合（10月）昭和医学専門学校附属病院（11月）南胃腸病院（12月）日本赤十字支店（木子資料）	S4	日本赤十字支店 木戸幸一邸 書机・椅子を無鑑査出品し二等賞になる（第16回商工展） キャビネットを出品し初入選となる（第10回帝展）		
		ニコライ堂（修復 2月）銀座伊東屋文具店（6月）太陽生命保険株式会社（6月）博報堂（6月）東亜同文館（6月）帝國農会（8月）日本赤十字産院寄宿舍（12月）	S5	井上候侯爵邸 書机・椅子を無鑑査出品し二等賞となる（第17回商工展） 扇型化粧台を出品し入選する（第11回帝展）		
		戸山教会（信濃町教会 9月） 昭和医学専門学校（1月）大阪金森旅館（6月）大阪市田商店（8月）	S6	戸山教会家具（一部）設計製作 大橋邸 小池邸 ビューローを無鑑査で出品し二等賞となる（第18回商工展） ライティング・ビューローを出品し入選する（第12回帝展）		スタジオを芝西久保町に移し「梶田工房」と改名
		山尾邸 設計 九州日報社（2月）浅草寺一山支院（2月）虎屋商店（3月）山一證券 設計 大阪政治教育国民会館（5月）	S7	芹川邸 市川寿美藏邸 サラセン風胡桃小車を出品し入電（第13回帝展）		
		琵琶湖ホテル 明治生命保険株式会社（3月） 寺井邸	S8	山尾邸一邸家具を設計製作する 喫煙卓が初入選（工房のメンバー 片野正次 第14回帝展）		この頃より服部時計店（現和光）との取引を始め小工芸品が増す
			S9	明治生命本社の家具全般を設計し、社長応接室のみ工房で製作 寺井邸（S10頃） 林下邸 牛堤清雄邸 松田龍気時計のデザイン		
			S10	伊藤鈴三邸（一部）		林二郎、渡辺明と工精会を結成
			S11	宝石箱を出品金賞になる（仏国主催「国際藝術・技術展」）		
			S12			
			S13			
			S14			第1回工精会を東京、大阪高島屋で開催 第2回工精会を東京展を高島屋で開催 物産統制令実施で高級家具の製作が困難となり工芸品が多くなる
			S15			第2回工精会を大阪展を高島屋で開催 東京工芸作家協会を結成 協会展を開催
			S16			
			S17	「松竹梅紋笥」を出品し特選となる（第5回文展）		
			S18			一関に疎開 一関木工（株）で木製飛行機製作に従事
			S20			終戦後、一関木工が一関市立授産所工芸部となる 技術顧問として木工技術を指導
			S21			授産所主催の工芸展をひらく
			S22	「瑞祥文手笥」を製作（遺作）		授産所展（白木屋）で厚生大臣賞受賞 岩手県北の国工芸作家協会結成 盛岡カフトクデパートで展示会開催
			S23			直腸がんのため死亡（5月8日）
				中野邸 守田邸 近藤邸		

家具の役割について考察では、細やかな点にまで配慮し日本建築のような感覚で幅広い様式を扱っていた岡田にとって、同様に様式を自在に扱う梶田はパートナーのような存在であった。また、その美術工芸的な家具は岡田の建築作品を仕上げる役割を持っており、岡田がこれによって自身の理想する細やかで整然とした室内を実現させようとしたと考えた。

さらに、岡田は古典様式に忠実に設計をただけではなく、同時代に興った様式の特徴を熟知し、それらを組み合わせて設計していたことに注目し、梶田の家具は室内装飾の加減を行うためのディティールとしての役割も担っていたと考えた。これは「過去の建築様式のディティールは新建築意匠の材料」^{注20)}とした岡田の設計姿勢をよく表している。

家具・室内装飾は、室内空間の完成度や雰囲気非常に大きく影響することから、細やかな点にまで配慮が必要とされる。したがって、以上のように、家具・室内装飾を分析したことで、岡田の設計意図や趣向といった本質的な姿勢をうかがい知ることが出来たと考える。

最後に、梶田が岡田の建築作品に関わっていた期間についての考察を行った結果、兩人とも設計活動を最も盛んに行っていた時期であったことがわかった。岡田はそれまで蓄積した古典様式の知識を取り入れた建築を数多く設計し、梶田は自身の工房を開き、質の高い高級家具を設計・製作し、数々の展覧会で受賞していた時期であったことが分かった。また、そうした活動が可能となった背景には震災後の建築需要の高まりから昭和初期にかけての好景気という社会状況が非常に大きく影響していた。そのため、その後の社会状況の悪化や岡田の死によってこうした作品が生まれることはなくなった。そういった意味でもここで取り上げた岡田と梶田による作品は非常に貴重なものであるといえる。

今回の調査では、岡田や梶田が保存していた図面の多くが震災や戦禍を奇跡的に逃れて残っていたおかげでこのような結果を得ることができた。しかし、梶田の図面のほとんどには物件名、室名が記載されていないため、図面を検討するための手がかりが乏しく、今回使った資料だけでは不十分であった。そのため、まだ多くの図面がどの建築作品のものであるか特定できていない。今後、新たな資料によってさらに研究が進展することを望む。

謝辞

本研究にあたり、多くの方々にご協力とご指導を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。ありがとうございました。
京都女子大学家政学部生活造形学科 小泉和子教授
千葉大学工学部 モリス・マーティン助教授
東京藝術大学大学美術館 島津京助手 芸術資料係 高柳智氏
明治安田生命相互保険会社 秋元俊一氏
株式会社メック・デザイン・インターナショナル 徳田裕二氏
(株)竹中工務店 東京本店 樋口成康氏
株式会社 文化財工学研究所 石川秀樹氏
信濃町教会 福田啓三氏

注

- 注1) 拙稿「岡田信一郎設計建築の家具・室内装飾と梶田恵 明治生命館の家具を例に」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2006年 F-2分冊 p. 515 において、岡田の建築作品の一つである重要文化財明治生命館の室内に用いられた梶田の家具を明らかにすることで、ルネサンス風の外観が印象的な明治生命館の内部空間はどのようなものであったかを考察した。
- 注2) 「梶田恵回顧展 日本のアール・デコ」(家具の博物館)昭和55年11月 図録『梶田恵回顧展 日本のアール・デコ』, 財団法人家具の博物館編集・発行, 1980年11月11日 目次は次のとおりである。「梶田恵回顧展開催にあたって」 小泉和子, 「梶田恵の作品と生涯」 中村圭介, 「アール・デコの世界」 鎌和田務, 「梶田恵と岡田信一郎」 前野まさる, 「梶田恵の思い出」 森口多里, 「梶田恵略年表」 中村圭介, 「梶田恵展出品目録」

- 注3) 「梶田恵家具木工芸設計図展」(東京藝術大学藝術資料館)1981年6月29日(月)~7月11日(土) 図録『昭和55年新収蔵作品 梶田恵家具木工芸設計図展』 奥付なし 目次は次のとおりである。「梶田恵と家具」 前野まさる, 「特別出品目録」
- 注4) 前掲 注2) 「梶田恵の作品と生涯」中村圭介,
- 注5) 東京藝術大学大学美術館所蔵「梶田恵家具及工芸品設計図」に、このときの出品作品の設計図が収められている。高島屋平和博陳列場家具として、ヘッパ・ルワイト様式の直線的な花輪の模様を施したスリート・スクリン、スワール、テーブルを出品していた。
- 注6) 東京藝術大学大学美術館所蔵「梶田恵家具及工芸品設計図」1569枚 雁皮紙・美濃紙・インキング・彩色, 梶田恵の家具設計図・家具配置図・工芸作品の姿図・詳細図を所収
- 注7) 東京藝術大学大学美術館所蔵「岡田信一郎設計建造物家具資料」1014枚 紙、淡彩, 岡田信一郎の建築作品の家具設計図・家具配置図・カーテン図を所収
- 注8) 国立国会図書館所蔵「岡田兄弟建築設計図」349件 9,859枚 岡田信一郎、岡田捷五郎兄弟の建築作品の設計原図を所収
- 注9) 「梶田恵回顧展 日本のアール・デコ」(家具の博物館)のための調査の際に、梶田の関係者から提供を受けた梶田作品の写真の複写 小泉和子生活史研究所所蔵
- 注10) 前掲 注9)と同時にに行った関係者への聞き取り調査から得られた情報を整理したもの 東京藝術大学大学美術館所蔵
- 注11) 岡田の建築作品を紹介する雑誌等、定期刊行物
- 注12) 前掲 注2) 「梶田恵の作品と生涯」中村圭介及び、前野堯 「様式美の挽歌-用と美の迫間で-」, 大川三雄「岡田信一郎年譜」『日本の建築明治大正昭和』, 8, p. 114-130, 三省堂, 1982.8
小林文子 大川三雄「岡田信一郎(1883~1932)の住宅作品にみる特徴について ~国立国会図書館所蔵の設計図書を中心とする考察~」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊, p. 369 1999.9
- 注13) 株式会社 文化財工学研究所 石川秀樹氏のご教示によると、もとは岡田が保管して、その死後に家族から国立国会図書館へ寄贈された図面だったという。現在、国立国会図書館が所蔵している「岡田兄弟建築設計図」をみると、家具やその配置図といった図面がほとんど見当たらないのは、ここから分けられた家具や配置図といった図面が東京藝術大学大学美術館に移管されたからである。
- 注14) 日赤大阪支部の設計を実際に行ったのは木子七郎(日赤技師)であるが、日本赤十字社の建築顧問であった岡田のもとで梶田が家具を設計・製作を担当した背景にはすくなく岡田の影響があったと考え、本稿では岡田の建築作品のひとつとして扱うことにする。
- 注15) 山尾邸の竣工年については明らかになっていないが、前掲 注12) 大川三雄「岡田信一郎年譜」において、昭和7年に設計とあることや、前掲 注2) 中村圭介「梶田恵略年表」より、家具の設計製作が昭和8年であることから、竣工年を昭和8年頃と推定した。
- 注16) 聞き取り資料より、今井邸の家具の納入が昭和10年頃であることから、竣工年を昭和10年頃と推測した。
- 注17) 前掲 注2) 「梶田恵の作品と生涯」中村圭介
- 注18) 岡田捷五郎「岡田信一郎(兄を語る)」『建築界』vol. 14 no. 12 p19-24 理工図書株式会社編・発行
- 注19) 岡田信一郎「新建築の意義」『建築雑誌』第28集 331号 日本建築学会 1914年

(2007年2月10日原稿受理, 2007年6月22日採用決定)